

# 2022年5月20日 第3385回例会

於： 横須賀商工会議所



幸仕しよう みんなの人生を豊かにするために

- <点鐘・開会> 12:30 八巻 会長  
<斉唱> 「それこそロータリー」  
<ゲスト紹介> \*神奈川歯科大学特任教授  
第65代横綱 貴乃花親方 花田 光 司 様  
\*神奈川歯科大学総合歯学教育学講座  
教養教育学分野准教授 川 上 正 人 様  
\*神奈川歯科大学企画推進室長 勝 野 賢 一 様  
\*逗子葉山デジタルサポーターズ共同代表/  
元逗子市教育委員会教育長 村 松 雅 様  
<ビジター紹介> \*東京調布むらさきロータリークラブ 谷 中 邦 彦 様  
\*横須賀北ロータリークラブ 社会・国際奉仕委員長 芹 澤 達 之 様  
\*三浦ロータリークラブ 社会奉仕委員長 鈴 木 康 仁 様  
\*横須賀西ロータリークラブ 幹事 嘉 山 賢 様

<村松様からのご依頼> \*GIGA家庭端末サポートプロジェクトへのご協力をお願い

<幹事報告> \*例会終了後第1グループ奉仕デー委員会 開催  
\*6月5日の奉仕デーへの早急な参加意思表示の依頼

<出席報告> \*出席委員会 猿丸副委員長より5月20日の出席報告

会 員 数	出席対象者数	出席数(ZOOM出席数)	欠 席 数	メイクアップ数	出 席 率
115名	109名	88名(7名)	21名	2名	82.57%

## <ニコニコ報告>

- ・谷 中 邦 彦 様 (東京調布むらさきRC) 本日お世話になります。“ご縁”に感謝です。
- ・芹 澤 達 之 様 (横須賀北RC) 本日はよろしく願いいたします。
- ・鈴 木 康 仁 様 (三浦RC) 本日もよろしく願い致します。
- ・嘉 山 賢 様 (横須賀西RC) 今日はロータリー奉仕で参りました。宜しく願い致します。
- ・三 役 神奈川歯科大学特任教授・第65代横綱 貴乃花親方 花田光司様ようこそお出で下さいました。本日の卓話よろしく願いいたします。
- ・北 村、松本(働)、加藤(働)、大野(働)、比 護、長谷川、大 石、松本(働)、梁 井、杉 浦、福 西、濱 田、長 坂、木 村、高 橋、吉 田、田 邊、岩 崎、植 田、田 村、五十嵐、畑、勝 間、小 平、二 瓶、南、田中(働)、波 島、猿 丸、江 口、小 沢、渡 邊、白 井、小 林(-)、澤 田、角 井、上 林、小 佐 野、鷺 尾、徳 永、前 川、根 岸、杵 渕、長 尾、藤 村 各会員  
神奈川歯科大学特任教授・第65代横綱 貴乃花親方 花田光司様ようこそ横須賀RC例会にお越し下さいました。本日の卓話を楽しみにしています。宇良は賜杯を掲げられるでしょうか？
- ・三 役 神奈川歯科大学 川上正人様、勝野賢一様、逗子葉山デジタルサポーターズ共同代表・元逗子教育長 村松雅様ようこそお出で下さいました。例会をお楽しみ下さい。
- ・岡田(働)、濱 田、植 田、笠 木、飯 塚 各会員 本日のゲスト神奈川歯科大学 川上正人様、勝野賢一様、逗子葉山デジタルサポーターズ共同代表・元逗子教育長 村松雅様ようこそお越し下さいました。ごゆっくりお寛ぎください。
- ・三 役 東京調布むらさきRC谷中邦彦様、横須賀北RC芹澤達之様、三浦RC鈴木康仁様、横須賀西RC嘉山 賢様、ようこそお出で下さいました。例会をお楽しみください。
- ・吉 田、岡田(働)、加藤(働)、飯 塚 各会員 東京調布むらさきRC谷中邦彦様、遠路ようこそお越し下さいました。例会をお楽しみください。

- ・飯塚、高橋、田邊、鈴木 各会員 本日のビジター東京調布むらさきRC谷中邦彦様、横須賀北RC芹澤達之様、三浦RC鈴木康仁様、横須賀西RC嘉山 賢様、ようこそお越し下さいました。相撲道をごゆっくりお聞きください。
- ・根岸 会員 誕生月祝いとして
- ・上田、二瓶 両会員 入会月祝いとして
- ・長谷川、小山、齋藤、福西、八木、馬場、波島、澤田 各会員  
先週の職場見学会は生憎の雨の中、クルーズは中止になりましたが、地元横須賀を知る良い日になりました。ありがとうございました。
- ・岡田、瀬戸、中村 各会員 5月21日(土)22日(日)三笠公園で3年ぶりによこすかカレーフェスティバルが開催されます。コロナを吹っ飛ばし皆さん盛り上がりましょう。
- ・三浦 会員 本日の会報担当。プレッシャーがありますが俺ガンバレ！

## <卓 話>

## 「相撲道について」

神奈川歯科大学特任教授

第65代横綱 貴乃花親方 花田 光 司 様

皆様、こんにちは。特任教授を仰せつかっております、貴乃花でございます。本日はどうぞよろしく願います。皆様、私は今年50歳になります。もともとの悪い滑舌が聞きづらいかもしれませんが、今日は一生懸命に、私が父の師匠から学んだことを皆様方にご口上を述べさせていただきたいと思っております。まず、VTRをお見せいたします。

今見ていただきましたのが私の最後の優勝、引退間際の優勝となります。皆さんご存知な競技ではございますが、アメリカンフットボールの一流選手の99%が脳震盪の障害に悩まされているという学会での報告があります。力士の場合は防具、甲冑がありません。その甲冑の代わりになるものが廻しです。廻しは巻くとは言わず、専門用語では懐で締めるといいます。廻しは腰骨と丹田、髷の結び目部分である髷の結び目を上に三点をつなぐ、これが力士の廻しの防具であります。相撲というのはこれにより、正中線という正しい身体の線を保って、衝撃に耐えうり、後



遺症の残らない鍛錬を築いていく競技になります。一般力士の立会い・ぶつかりの当たりで、約1トン近くの衝撃が生まれます。双方で400~500キロずつの当たりになります。それぐらい相撲というのはとかく過酷な競技です。私の先代、師匠は元々数年前まで50Mバタフライの中学日本新記録を持っていた水泳の選手でした。ご本人から聞いていることは、メキシコオリンピックで出場するということが最大の夢であり、決して力士になるというものではありませんでした。しかし結局、家計の都合もありまして、力士の世界に入りました。当時は日大豊山という名門水泳の高校に入学が決まっていながらも、力士に入門することになるわけです。私が幼少の頃から言われたのが、「とにかく相撲をやる時には生半可でやるな。水泳も何十キロと毎日泳いで、もうくたくたになって、立っていられないくらいになるが、相撲は本当にきついんだ。」ということです。これだけは各親方達もその競技をやっている方々が、角界に入ってきてみなさん同じことを言われております。その中で、私が特に幼少の頃から師匠より学んできたことを今日ご口上いたします。

厳格と健脚、強靱な足腰、人は足腰にてしなやかにもなり、怠れば大怪我のもとにもなり、致命的なものにもなります。力士としての人生もそうだが、一般教養として力を身につけるべく、上位を目指してこそ、価値あるものになりやすい。その世界しか知らないことは強さでもあるが、弱みでもある。中途半端な訓練などは、どの世界においてもきつと通用しないだろう。言うが易し、行うは難し、これが本当のところだろう。どんなに辛くても涙が出るうちは辛いうちには入らない。それを噛みしめて、ひたむきにできることは、その人が持つ威力であり、寡黙でいることは強靱な足腰を身につけた証拠になるだろう。物心ついたときからこんなに厳しい厳格なことを言われて育ちました。私は猪突猛進的な、何かをやる時には集中して周りが見えなくなるという弱さもございます。私が師匠から育てられた学びは、ご自分が水泳選手になりたかったということもありましたので、私を力士にさせるという教育はされておらず、大学まで順当に出て、気になる職業について欲しいということが、師匠の願いでもありました。しかしながら、私は中学校から当時の名門相撲部に入学することになります。しかし、師匠は私を力士にさせるとは全く考えておらず、大学まで行ってほしいという願いでございました。先ほど述べた、寡黙でいられることは強靱な足腰を身につけた証拠になるだろうということは、師匠は寡黙でひた向きにやればやるだけ、相撲だけではなくどの世界にでも通用できるものになりやすいという教育だったと思います。このようなことを言われ、叱られも、叩かれもしました。しかし、圧倒的に諭された記憶があり、それは私にとって厳格と健康な足腰の作り方を教えられた父からの論語のようなものでした。誰にでも分かりやすい、その人に言われるとそのことしか頭に浮かばない、またこれが父子相伝、父から子へのしつけでもあり、一子相伝、弟子への訓示でもありました。不惜身命、命は借り物である、の道の始まりでもありました。入門に至るまでの経緯は未だに、私自身半信半疑なところがあります。なぜなら大学を出て、興味ある仕事に就いてほしいと育てられており、幼稚園はクリスチャン、小学校は仏教、中学校は天地の理念の基、中高一貫性の男子校で初めて相撲部で稽古を本格的に重ねることになります。この3年間、中学生で個人成績を残せることなく、強くなりなさいの教えだった、入門の道への芽生えが生まれてしまいました。親子の縁は切らなくてはならない当然の世界であるのは分かっていました。それを条件に許可を得て、15歳の2月初頭、力士になる者の契約は義務教育以後ですが、新卒本場所の時期が3月初頭から初日を迎えるために、力士になる方はどなたもそうであったように、校長先生からの卒業免除を頂いてからとなります。学識も教養もないまま、相撲部屋の生活のすべてが始まり、実家も離れて修行の道が始まり、信じられないほどの厳しさと徒弟制度の酷さを目の当たりに致します。



出世が早いと師匠の息子であり特別扱いされているからと言われてしまいますが、生活の恐ろしさは稽古場ではない、生活の各場面でのしきたりが、至る所での監視や師匠の実子としては逃げ場のない日々です。当然のごとく、入門と同時に故郷が近すぎて、そして他とは違い、二度と帰れない師匠の家が実家となりました。暗黙の了解であり、諸行無常的な掟もあります。15歳の子供にとってはなかなかのものです。本人は笑えない状態です。父から入門の許可が出た時、一言目に間髪入れずに言われたことが、「他の部屋に預ける。」そう言って許可が出されました。

私自身、その時はやっぱり私は子供だから、丁稚奉公に出されて当然なんだ、そう言い聞かせながら中学生時代の以前の不甲斐ない成績を乗り越えるための決心でしたから、土俵に上がりさえすればそれで良いと、自分に言い聞かせて来たのを覚えております。父の言うことは絶対です。抗う気持ちすらありません。他の部屋に預けると言われた時の私のかすかな気持ちはやっぱりそうか、お前は預ける、直観は当たりました。冒頭、健康な足腰と申し上げましたが、その作り方は基本的要素の重複と正確性を高めるのみ、誤差の中の誤差を追求するのみ、ことばで教わることは身に付けることにはならず、五感を駆使し、感覚を養い、瞬間を学び、初志貫徹なものです。しかし、初心に帰ることとは違い、わずかの差の中に進化を求めて振り返

らずに納得するまで明日は来ない、諦めない気持ちを本能のままに、呼吸を整え、打ち込む他に意味もありませんでした。その道も険しく、熱いうちに鉄は打つような鍛錬です。現在、外国勢の横綱また力士が活躍しております。私もモンゴルの力士を一人預かっておりました。しかしながら、いつの時代も日本の出身横綱というものが存在しているか否かで、全く国民の皆さんの大相撲見る目線が変わってこれられると思います。近々の課題、永遠の課題といたしまして、力士の日本人横綱を育てるためには、幼稚園もしくは小学校低学年から触れ合いながら遊ばせながら、相撲の社会に興味を持ってもらい、15歳～20歳の間で日本人出身叩き上げの大関・横綱が育つかどうかが決まってしまう。大学出身の立派な力士達もたくさんおられます。しかし、私の師匠も「体の柔らかい、頭の柔らかいうちに、相撲の本質を覚えていくことこそ、3年先の6年先の稽古である」とよく言われておりました。これは三つの要素がございます。第一に本心、慷慨しないもの、第二に中心、目標となるもの、三つ目は重心、基礎となるものです。三つの要素を特に気にしながら、力及ばずの自分から脱却するための核となるものとして、小さな力から大きな力へと繋がる未知なる自分探しの旅です。実践の場では重心を低くした姿勢が求められます。このため、鍛錬の重複と正確性の自らの考え方はなくし、実直に素直に学ぶこと。やがてそれが自己矯正となり、努力を怠ることなく努力は報われるものではない理念をしっかりと抱き、報われない思想の起点から理想の線を合わせて行く方法を体で覚えて行くのが理想です。集中力を磨く、横綱になれたことの発起点がどうせ報われないのなら、やるだけやって当たって砕ける、このことが父から師匠からの教えのおかげで、心・体・気持ち・素直・感謝・捨て身の一体な心の構造が蓄積させられて、昇進できただけのことでありました。各世代別に恩師たちにも恵まれたこともあり、ひとつ覚えに基礎を保つことで新しい動きを見つけられる認識をさらに上へ持てたことで、私はこのように生きてこれたものと思っております。

ちょっと前に出させていただいて、四股の形を少し皆さんにお見せできたらと思います。引退に近づくということは、足腰が硬くなっていくということを意味します。私たち二足歩行で生きているものは、土踏まず、足の裏からの大地のエネルギーを得て、丹田と頭の上髷の結び目と考えていただいてこれを天に向かってまっすぐ背筋を保つことにより、健康が保たれていると言われております。あぐらをかいているときでも、この正中線を保ちながら真っ直ぐを意識して、じっと座っているだけでも、足腰は柔らかくなってきます。ただ現役の力士たちはやはり、15歳～20歳になるまでに、その後の10年の実績値が決まってくる厳しさがございますので、晩年は足腰が横綱に上がった時とは違い、年々故障の歪もあり、蓄積があり、動かなくなってきました。ちょっと四股の基礎を皆様にご報告します。やったことがあるかと思いますが、柔道、剣道、弓道、アメリカンフットボール、野球もそうですが全ての競技において、この正中線、真ん中の線というのは必要とされます。四股は1・2・3です。まっすぐ立ってかかととかかかとをつけて、1・2・3です。返る時は3・2・1です。この123・321・213と3つの間を行き来していくように、その誤差を煮詰めて、少しずつ自分のものになっていく。重力がかかっておりますので、その正中線というまっすぐの中心軸を持っていくことで毎日鍛錬をするということです。これが基礎です。力士は足を上げて四股をふみませんが、元々の基礎は123から足の裏をしっかりとついてまっすぐぶれないで落ちていく、これが基礎になります。これが呼吸法でもあります。呼吸をしっかりと吐きながら、下に沈んでいく。相撲の実践の場では大きな相手の力士を寄り切る時に、相手が息を吸い込んだ時に浮力で重心が上に軽くなった時が攻めどころです。ですから、常に重心を低くして、息を吐き出して、下半身に力の流れが伝わっていくように鍛えていくのが基礎です。この姿勢で1～2分間保って、初めて足を上げる四股が踏めるようになります。私も毎日やっているのですが、年を取りますと年々息が上がってきます。これがウェイトトレーニングとか重いものを持ってやるということよりも、自分の体重だけで鍛え上げることがいかに強靱な肉体が完成していくかということが、相撲道の基礎でもあります。四股を踏むときに、足の裏の底力という言葉は皆さんよく聞かれますが、若い世代の子どもたちが底力と聞かされても何のことかよくわからないことが多いかと思います。底力というのは、足の裏をしっかりとついて、裸足の精神で大地のエネルギーを自分で吸い込んで、呼吸を吐き出して邪気を出して、内臓、五臓六腑を鍛え上げることです。足の裏がいかに重要な箇所であるかということになります。お子さんたちに話をする場合にも、四股というのは漢数字の四というのが、四股の四になっております。実は、意味合いはかかとと土踏まずの骨が両足で4つあります。その土踏まずのバランスが二足歩行の私たちの生涯の健康を維持する基礎となるということで、それがまた股関節に繋がるという意味でその名前の由来になっています。そのため、いかに姿勢が崩れると内臓疾患が生まれやすく、喘息が生まれやすくなるというのが根本にあります。私も入門するまで発作で亡くなりそうになったこともありました。

子供の頃は怪我也も病気も多く、決して強い体とは言えませんでした。この世界に入りまして、若いうちは数をこなして、良いか悪いかを高めていくという作業になりますが、この四股という文化が日本の文化であるとつくづく感じております。相撲というのは、「シューモ」というヘブライ語からきているとも言われております。ですから、アメリカの大リーグがアメリカに本拠地がありますように、日本の大相撲の本拠地は日本にございます。しかしながら、たくさん海から入ってきた文化が、日本の大相撲の土俵の文化に残っているかと思っております。

そして最後に皆様に御礼を申し上げるとともに、また私がお世話になっております我が大学、鹿島理事長への恩義に応えるように理事長と全国を回り、神奈川歯科大学は日本一の歯科大学へ発展すること、そしてたくさん若手人材がここ横須賀の地に集まることが、現在の真新しい私の夢です。本日の機会を与えて下さった皆様にも心より感謝を申し上げ、ご縁を賜りましたことを御礼の言葉とさせていただきます。

そして来月6月12日に神奈川歯科大学に名称として、ジャカラダの西洋桜の木がございます。このジャカラダフェスティバルで私が1000食ちゃんこを振る舞うことになりました。そして、日本料理では有名ななだ万、そこの料理長も6月12日ちゃんこを作りに来てくださいます。午前11時から午後1時までちゃんこをお出ししております。皆様お時間、また心に余裕がある場合には是非とも本大学へお越しくださいれば、とても嬉しく思います。最後に、私が父から学んだ言葉を最後にします。本領発揮とは、同じ家で暮らし、そこから生まれたすべての苦しみを払いのけた時、現れるもの、それを故郷と信じております。また、神奈川歯科大学でお世話になっております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

<閉会・点鐘> 13:00 八巻 会長

週報担当 三浦 寿夫